



繭から糸を紡ぐ

いにしえ
古と未来をつなぐ伝統の糸

繊維のダイヤモンド
穂高天蚕糸



天蚕産業発祥の地・安曇野。穂高有明地区では、240年にわたり受け継がれてきた天蚕産業の伝統を大切に守り続けています。天蚕文化を紡いできた地域の取り組みを紹介します。

江戸時代から続く伝統「天蚕」

深刻化する伝統の継承

安曇野では江戸中期から天蚕の飼育が行われてきました。最も飼育が盛んだった明治30年代には、穂高有明地区の農家の半数が天蚕飼育をしており、京都の西陣や丹後へ糸を出荷していました。当時から、天蚕糸は優美な光沢と丈夫さ、そして温かいという優れた特徴があり、その希少性から「繊維のダイヤモンド」と呼ばれています。また、天蚕産業は、明治初期の安曇野の経済を支えた蚕糸業の一つであり、当時の生活や価値観を知る上でも貴重な文化財といえます。天災や戦争で生産が途絶えたこともありますが、その都度復興し、240年の伝統文化を今につなぐことができました。自然が生み出した緑色の繭から紡ぎだす糸、その天然の美しさに、今もたくさんの方が魅せられています。

伝統の継承に欠かせない後継者問題に、安曇野の天蚕産業も直面しています。市天蚕センターを拠点に、安曇野市天蚕振興会は天蚕の飼育や繰糸、機織り技術を後世へ伝承するため活動しています。

機織りの技術の継承は、市と天蚕振興会が連携し、令和2年度から1期2年制、10年計画で後継者育成を進めています。昨年12月には第1期終了の5人が着物や帯の作品展を開くなど、少しずつ後継者が育っています。

一方、天蚕飼育者の担い手不足が深刻化しています。天蚕振興会の田口忠志会長は、「機織技術とともに、飼育してくれる人が増えてほしい。そのためにはまず、天蚕を知ってもらいたい」と、伝統の継承に意欲的に取り組んでいます。

1枚1枚丁寧に、心を込めて贈る伝統

感謝のコサージュ



天蚕の魅力と文化を知り、ふるさと安曇野を愛する人になってほしい。そんな思いを込めて市内の小学校では、6年生が卒業前に天蚕の繭を使ってコサージュを作り、保護者へ贈る伝統があります。その活動は穂高北小学校から始まり、現在は明南小学校、堀金小学校など市内に広がっています。講師の赤羽悦子さんはこの道30年の大ベテラン。2個の繭を使って子どもたちにコサージュ作りを教えています。

と、赤羽さんは丁寧に指導しました。最後に、赤羽さん特製の葉っぱとめしべを花に取り付けて仕上げ。持ち手をリボンで巻いて、花びらを広げたら完成です。

十人十色コサージュに込めた思い

コサージュ作りはまず、繭をハサミで切り、繭の外側と内側を剥がして花びらを作ります。切った繭の中から乾燥したさなぎが出てくると、子どもたちの手が止まります。「命を使う」ことを実感しているのかもしれない。子どもたちにとって、繭を切るのも剥がすのも初めての作業ばかりです。小さくなったり、破けたり、苦勞しながら心を込めて一生懸命作ります。

花びらができたら土台に貼り付けていきます。色と形をみながら一枚一枚丁寧に接着剤で貼っていきます。花びらを何枚も重ねるのが難しく、「先生これでいいの」と途中不安になる子どももいました。「自分の好きなように貼って大丈夫。ちゃんときれいになります」

丁寧に作られていて、見るだけでもほほ笑ましくなる出来栄のコサージュが次々と出来上がりました。友達と並べて、「○○ちゃんのコサージュの方が上手」などと互いにたたえ合う場面が教室のあちこちで見られました。

出来上がったコサージュを誰にプレゼントするかと聞くと、「お母さん!」「お父さん!」と元気に答えてくれる子どもたち。「いつもご飯を作ってくれてありがとう」「お母さん、産んでくれてありがとう」などと、コサージュに込めた感謝の気持ちを話してくれました。

地域が誇る伝統・天蚕繭で作ったコサージュ。それ自体も珍しいものですが、両親への感謝の心がたっぷり詰まった世界に一つだけのコサージュは、特別な仕上がりでした。